

国際協力特別賞

「視点の変化」

市立札幌開成中等教育学校 5年

小笠原 奈歩

私はこの夏、ラオスのスタディーツアーに参加した。正直、ラオスの地理的な位置も知らずただ、世界を、発展途上国を見てみたいという気持ちで参加した。

そのスタディーツアーでラオスに車いすを届けるというプログラムがあり、私は出発前に車いす整備のボランティアをした。小学生の時、足を骨折して車いすには少しお世話になったことがある。車いすに乗れて嬉しかったけど、幼いながらも、車いすで毎日生活するのは大変だと感じた。また、知り合いにも車いすを使って生活する人がいるので車いすには馴染みがあったが、車いすの整備に関わるというのは初めての経験だった。日本で使われなくなったという車いすの部品を1つ1つ丁寧に取り外し、灯油を使ってねじやベアリングを洗い、磨き直し、組み直して動作確認をし、最後に座席シートや手すりを拭く。灯油を使っての作業は鼻が痛くなるほどで、軍手を外しても手が黒くなっていて臭かった。全て終わるのに2時間半ほどかかり「疲れた」というのが本音だった。最初は自分の経験値を上げるいいチャンスだと思うだけだったが、整備していくうちに送り先の方はどんな人なのか、この車いすを使う姿、喜ぶ姿を想像して整備している自分がいた。

いよいよラオスへ出発。現地で車いすを引き渡すため、ラオス女性障がい者施設に向かった。都心部の道路は、アスファルトで舗装されているが、郊外の道は舗装がされていなく土埃が舞った。施設に到着すると、皆さんがにこにこした笑顔で快く迎え入れてくれた。想像していたよりも施設にいる人たちの様子は明るかった。車いすは、ボイユーさんという28歳の女性に渡すことになっていた。ボイユーさんは、両足の膝から下はなく、私たちが整備した車いすを目の前にして、嬉しそうにまた、緊張しているようにも見えた。自分の細い両手で軽々と体を持ち上げて乗り換え、乗り心地を確かめてくれた。私はボイユーさんの嬉しそうな笑顔を見て逆に嬉しくなっただけでなく、周りにいた方も楽しそうにしている姿を見て本当に車いすを待ち望んでくれていたのだと感じ、自分が整備に関わられて良かったと強く感じた。

その後、施設で私たちは、出会えたことに「ありがとう」の気持ちを込めて、よさこいソーランを披露した。会場がとても盛り上がり一緒に踊ることになった。積極的に私に振り付けを聞いて一生懸命踊ってくれている姿を見て、「暗い」とか「ハンデがあるから」と考えている自分が浅はかだと感じた。ラオスの伝統的な踊りも披露してくれ、自分たちもその踊りに誘われて一緒に汗だくになるまで踊った。

施設を後にしてから気になったことがあった。実は、ラオスの建物内や道にあるちょっとした段差が気になっていたのだ。日本ではスロープやエレベーターが至る所にある。今まではハンデが

ある方が不自由なく暮らせるように、様々な配慮をされていることに何の疑問も持っていなかった。しかし、ラオスでは段差がある所が多い。それでも、ハンデのある方が暮らせている。よく考えてみると、ラオスでは、周りの人たちの支えがあるからそんな少しのギャップでも気にすることなく生活できるのだろう。私は、しっかり整備されている日本の在り方が全てではないということに気付かされた。

本当の暮らしやすさとは何だろう。スロープなどがあれば、それで解決できるのか。ラオスで見たような、人と人が自然に助け合える社会のことではないのか。ハード面がいくら整備されてもソフト面が整っていなければ何にもならない。自分が実際にラオスに行って車いすを運んだことで、社会を今までとは違う視点から物事を見ることができるようになった気がする。私は、そんな視点を大切に、人と人の間の段差も解消していける世界にしていきたい。